

第2学年 国語科学習指導案

日 時 令和2年9月28日(月) 公開授業1
学 級 遠野市立遠野中学校 2年4組33名
授業者 教諭 中野 徹也

- 1 単元名 「反証を生かして自分の意見を伝えよう」
主教材 『書く(論証・説得) 反対意見を想定して書こう 意見文』
副教材 『読む(吟味・判断) 哲学的思考のすすめ』

- 2 内容のまとめり 第2学年 「B書くこと」

3 単元の目標

- ・自分の立場や意見が読み手に伝わるように、根拠を明らかにして文章を書こうとしている。
〔国語への関心・意欲・態度〕
- ・根拠となる具体例を示したり、反証を展開したりして、意見文を書くことができる。〔Bウ〕
- ・自分の立場や意見が読み手に効果的に伝わるように展開を工夫して意見文を書くことができる。
〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項 イ(オ)〕

4 単元について

(1) 生徒について

1 学期の各章で行ってきた「書くこと」に関する学習活動は、下記の通り。

第1章 短歌の近代作品のリメイク作品とオリジナル作品を書き、全体で発表交流する。

第2章 『卒業ホームラン』の登場人物を選択し、それぞれの「ホームラン」を解説する文章を書いて、同じ人物選択・異なる人物選択の2種類のグループで発表交流。

第3章 「食」や「環境」を題材に、学校図書での調べ学習によるレポート作成と全体交流。

読む教材として第3章の『鯉節 世界に誇る伝統色』では、読み取る手段として、目的に応じて字数の異なる三種の要約を書くことに取り組むとともに、筆者の表現の工夫を抜き出す学習にも取り組ませ、「『客観的表現と主観的表現』『対比』『ナンバーリングやつなぐ語句』『文末表現』」等の効果について捉えさせ、続くレポート作成に生かした。

また、そのほかに図書委員会活動に位置づけた、全校での新聞スクラップ学習に取り組んでおり、新聞を読んで選んだ記事を元に、自分の考えを書いて交流し合う活動を行っている。

これらの学習活動によって、読み取ったことをもとに300～400字程度の文章を単位時間内に書き上げる力が身につけてきている。

(2) 教材について

本教材は、意見と根拠を書き分けるだけの意見文からステップアップし、意見を支える強い根拠を持つ意見文を書く力をつけることをねらいとしている。根拠をより客観的なものにすると共に、反例を予想し、それに対する反論(反証)を考えさせることで意見文はより強固なものになる。また、意見文を書いた後に互いの意見文を読み合い、評価したりアドバイスしたりする活動を取り入れることにより、読み手のわかりやすさを意識して書こうとするのにふさわしい学習材となっている。

(3) 指導について

本単元では、以下の【手立て】を取り入れることで、生徒一人一人が目標を意識して活動し、学習の成果を実感できるようにする。

【学習用語の理解】

第4章で先行する読む教材『哲学的思考のすすめ～』から、筆者の考える「思考のための技術」として次の部分をもとにしながら、「反例」+「反論」=「反証」という用語を理解させておく。

ここで出した結論に当てはまらない具体例はないか、探してみよう。ある考えに対して、その考えに当てはまらない具体例を「反例」とよぶ。反例があるなら、その考えにはまだ説得力がないということになる。どうだろう。失敗したのだけれども恥ずかしいとは思わない、そんなことはないだろうか。もしそういうことがあれば、それは反例になる。考えてみよう。

【モデルによる意見文のイメージ化】

- ①生徒が前単元で書いたレポートとの比較
- ②新聞の投書や論説記事の分析
- ③昨年度の作文や、教科書の作品例での文章構成の読み取り

【作文を書き切り、学習の成果を実感できる手立て】

- ①書きやすい6～8個（教科書提示+2～4個の追加）のテーマ
- ②小グループで、互いの意見文の伝わりやすさについてチェックし合える場面【本時】
 - ・立場は明確に配置され、客観的な根拠は複数読み取れるか。
 - ・反例を想定し、それについての反論が読み取れるか。
- ③意見文のよさの相互評価（ふせんシールで可視化）の場面
- ④誰のどのようなアドバイスが役立ったかも含めて振り返る場面

5 遠野中学校の研究との関わり

【研究主題】「主体的に学ぶ生徒の育成 ～自分の考えをもち、関わり合う授業を通して～」

（関わり合う場の設定 A自己との関わり B他者との関わり C教材との関わり）

視点1「課題意識の持続」…「反例」「反論」をキーワードに、既習事項からのステップアップを単位時間ごとに学習課題に取り入れていく。

視点2「達成状況の把握」…授業の中で教師と生徒の「評価基準」の共有に努め、学習態度や学習シートの振り返りの中に現れる成果や課題を捉える。

視点3「関わり合う場面の設定」…読み手に伝わる書き方か、誰の評価によって自分の文章がよりよくなったかをまとめるための必然的な関わり合いを設定する。
関わり合いのあとには、自力解決の時間を確保する。

6 単元の評価規準

国語への関心・意欲・態度	書く能力	言語についての知識・理解・技能
①自分の立場や意見が読み手に伝わるように、根拠を明らかにして文章を書こうとしている。【関】	①立場や意見が読み手に効果的に伝わるように、根拠となる具体例を示したり、反例を挙げその反論を盛り込んだりして文章を書いている。(ウ) 【書】	①読み手に自分の考えやその根拠などが効果的に伝わるように、文章の展開を工夫している。(イ(オ)) 【知】

7 指導と評価の計画（6時間扱い ※本時はその5時間目）

時	ねらい・学習活動	重点「評価規準」	評価方法
1	・単元の見通しをもつ。 ・自分のレポートの具体例や提案を読み、読み手が納得しづらい点は何か、反例や反論を考える。 ・簡単な例題や教科書モデルの論証の組み立てを捉え、根拠の弱さや反例を考える練習をする。	【関】①	学習シート 観察
2	・新聞の投書や論説記事を読んで筆者の立場や具体例を検討し、反例や反論を考える。	【知】①	学習シート 観察
3	・自分のテーマを決め、意見文の構想を練る。		
4	・意見文を書く。	【書】①	作文 学習シート
5	・意見文を読み合い、より説得力が高まるよう書き見直す。 【本時】	【関】① 【書】①	作文 観察 学習シート
6	・作品を発表し合い、学習の成果を振り返り、次のグループプレゼンテーションへの学習の見通しを持つ。	【関】①	学習シート

8 本時の指導（5時間目／全6時間）

（1）目標

- ・自分の立場や意見が読み手に伝わるように、根拠を明らかにして文章を書こうとしている。
【国語への関心・意欲・態度】
- ・根拠となる具体例を示したり、反証を展開したりして、意見文を書くことができる。【書くこと】

（2）展開

段階	学習内容	生徒の活動	・留意点等 ●評価
導入	・2分前音読 (あいさつ)		
	1 前時の想起	1 前時に書いた自分の意見文を読み返し、意識したことや不十分だと感じたことを発表する。	視点1 課題意識の持続 ・既習のモデルを提示し既習事項をイメージしやすくする。
展開	2 学習課題と見通しの把握	2 学習課題を確認しグループ形式で話し合う時の留意点を確認する。	・感想ではなく、推敲のアドバイスを書くことを強調する。
	書いた意見文の説得力を高めよう		
展開	3 学習課題の解決		
	(1)「説得力を高める」観点の確認	(1) 相手を納得させるために必要なことは何だったかシートに沿って確認する。 ・頭括式、尾括式、双括式 ・具体例の客観性 ・反例に対する反論（反証）	
	(2)観点による他者文章の評価	(2) 同テーマ3人でグループを作り、回し読みしながら、チェックシートに読み取れた（伝わった）内容をチェックしていく。	視点3 B：他者との関わり合い ・チェックシートを準備し、観点に沿って他者の文章を評価できるようにする。
	(3)他者評価を受けての自己批評	(3) 説得力を高めることを目標に、チェックシートをもとに相手を読み取りづらかったところを書き直す。 完成した生徒は追加の課題に取り組む。	●自分の立場や意見が読み手に伝わるように、根拠を明らかにして文章を書こうとしている。
展開	(4)事前事後の比較	(4) 意見文の事前・事後を見比べ、変化を評価し合う。	・教師が一例を画像で示し、その後グループで読み合う。
	4 学習のまとめ	4 説得力が高まり、相手が納得した点をまとめる。 ・構成上の手直し ・根拠や反証上の手直し	●立場や意見が読み手に効果的に伝わるように、根拠となる具体例を示したり、反例を挙げその反論を盛り込んだりして文章を書いている。
終末	5 本時の振り返り	5 読み合いを通してどのように書き直すことができたか自己評価する。	視点2 達成状況の把握
終末	6 次時の見通しの把握	6 次時の発表会に備える。	

(3) 板書計画

5:00

〈書く〉
反論には反証の倍返しだ。

自分の書いた意見文の
不明確なところ
反論されたところ
はどのか

自分の意見文の
説得力を高めよう

結論
頭括式
尾括式
(構成)
双括式 ↓ 下構成
↑ 上構成

根拠
数が多いほどよい。
二つ以上 ナンベオリテ
具体例 客観性が高いほどよい

→ 強く支える

反証 反例を考える。
反例に反論する。

自分の立場を繰り返した。
根拠を追加できた。
よりはきりやすい。
反証を入れることができた。

振り返り